

松岡 雄太（言語学）

## モンゴル語のAspectに関する研究

### －満洲語・朝鮮語との対照研究－

本論文は、中国内蒙古自治区東部のホルチン方言、及び中世モンゴル語、近代モンゴル語を対象とした、Aspectに関する体系的な研究である。Aspectとは、動作を時間的経過の観点から見る形式であり、日本語では、例えばタベルやタバタの-ルや-タがAspect形式と言われる。

本論文では、第2章で、話者の直感を十分に利用できる現代語を対象とし、体系的かつ精密な研究を展開した。第3章では、話者のいない文献言語を対象とし、文脈や、他言語との対訳資料を用いて、Aspect形式の意味を明らかにした。近代語の議論において、「蒙文档案」、『蒙語老乞大』、『初学指南』といった口語性の強い文献資料を用いた点も、本論文の特色と言える。本論文の主張は、次の4点にまとめられる。

- (1) 現代ホルチン方言のAspect体系は、「一般相」と「継続相」の対立をなす。「継続相」は、さらに「動的継続相」と「静的継続相」の対立、「継続相」と「長期継続相」の対立をなす。
- (2) 現代ホルチン方言のAspect形式は、結合する動詞によってAspect的意味が変化するが、これらのAspect的意味は、結合する動詞の「限界性」及び「動作を動的に捉えるか、静的に捉えるか」によって決まる。
- (3) 中世語モンゴル語Aspect体系は、「一般相」と「継続相」の対立をなす。「継続相」は、さらに「動的継続相」と「静的継続相」の対立をなす。中世語には、現代語に見られる「継続相」と「長期継続相」の対立はない。
- (4) 中世語に見られない「継続相」と「長期継続相」の対立は、遅くとも18世紀末までに生まれたと考えられる。また、中世語から現代語に至る過程でAspect体系が変化した原因として、言語接触による満洲語のAspectからの影響があった可能性がある。

モンゴル語のAspect研究は、これまで、明確な方法論が示されないまま、いくつかの形式に関して断片的に研究が行なわれているという状況であった。本論文は、Aspect研究の明確な方法論を示し、一貫した方法論でモンゴル語のAspectを体系的に研究している点が、高く評価できる。

よって、本調査委員会は、本論文の提出者が、博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいと認める。